

令和元年6月24日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02269

研究課題名(和文) 高麗の仏塔・仏像にみる遼・金の影響に関する調査研究

研究課題名(英文) A research on the influence of Liao and Jin on buddhist stupas and images of Goryeo

研究代表者

水野 さや (MIZUNO, SAYA)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号：10384695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：高麗の仏塔における仏教尊像の選択については、統一新羅8世紀後半以降の舍利信仰に対する理解の変容とともに、遼・金の仏塔にみられる陀羅尼の効力とその教理的な理解を可視化する舍利信仰への変容が影響を与えていると推測された。

従来、高麗の仏教尊像に対しては、五代・宋との影響関係が活発に論議されてきた。しかしそれに加えて、東北アジアにおける仏舎利および仏塔信仰の発展過程において、五台山信仰の威光を受け継ぐ遼・金の仏塔・仏像も視野に入れて高麗の仏塔・仏教尊像を考察することも、重要な視点であると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、高麗の仏像・仏塔にみられる遼・金の影響を、まずは遼・金の仏教造像を体系化することから始め、高麗の仏塔・仏像との総合的な比較考察へと展開させ、五台山の舍利信仰を介した塔のあり方、仏像の造形的特徴の形成について明らかにすることを目的として取り組んできた。従来、高麗の仏教美術に関しては、両宋との積極的な関連性の指摘に終始しており、仏塔や仏像に見られる宋以外の要素については、元との関わりにおいて取り入れられたと理解されてきた。このような研究の現状において、朝鮮半島から遼・金という別の視点を、特に仏塔信仰、仏舎利信仰の側面から促すことにつながられる点が、本研究の第一の意義と思われる。

研究成果の概要(英文)：About the choice of the Buddhist images on the stupa in Goryeo, it is supposed to be composed of two elements; the one of the succession to change-understanding the Unified Silla, second half in the 8th century; the second of the influence on change-understanding in Dharani reliquary and doctrine understanding belief which visualizes the stupas in Liao and Jin.

The influential relation with the Five dynasty and Song has been argued actively to a Buddhist images in Goryeo. In addition, it is the one of the important viewpoint that, throughout the development process of the Saria and Stupa reliquary in the northeastern part of Asia, Liao and Jin who inherit the authority of Wutai-shan reliquary.

研究分野：東洋美術史

キーワード：高麗 遼 金 舍利信仰 仏塔

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来、高麗の仏教美術に関しては、五代・宋との関わりの中で理解されることが多かった。しかしながら、特に仏塔の浮彫尊像に関しては、遼・金の類似性を看取することができる。華嚴と密教が融合した五台山信仰は統一新羅時代には朝鮮半島に伝わり、高麗においても継承されていることから、唐代からの五台山信仰の威光を受け継ぐ遼、さらに遼の仏教を継承する要素の強い金に関しても、高麗の仏教造像および仏塔の理解にあたり、重要な一要素となると推測される。この点が本研究を思い立った背景にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高麗の仏像・仏塔にみられる遼・金の影響を、まずは遼・金の仏教造像を体系化することから始め、高麗の仏塔・仏像との総合的な比較考察へと展開させ、五台山の舍利信仰を介した塔のあり方、仏像の造形的特徴の形成について明らかにすることである。

3. 研究の方法

上記目的の達成のため、本研究においては次の方法を用いた。

韓国国内における遼・金の仏教美術に関する見解の収集

従来、高麗の仏教美術に関しては、日本国内の研究においても同様に、両宋との積極的な関連性の指摘に終始しており、仏塔や仏像に見られる宋以外の要素については、元との関わりにおいて取り入れられたと理解されてきた。しかし、その根拠の多くを「宋風」という漠然としたイメージに依るところもあり、遼・金の作例に引き継がれた宋代要素との区分がなされていない。また、元において消化・吸収された金的要素との区別もない。このような現状を客観的に把握し、日・韓の従来における問題点を明確化する作業を、継続して行う必要がある。

遼・金・高麗の仏教造像の作例収集

(1) アメリカ国内における遼・金・高麗の仏教造像

アメリカ国内における遼・金・高麗の仏教造像については、その大半が、制作年代に関して「宋」と総括されることが多いのが現状であり、未だ遼・金・高麗の仏教造像の様式的・図像的観点からの識別があまり意識されず、進展していないと思われる。換言すれば、これは10世紀から13世紀における宋・遼・金・高麗の仏教造像において、教理的・造形的特徴上に見出せる影響関係の重層さのためとも言える。すでに調査におよんだ中国、台湾、ヨーロッパの博物館・美術館に所蔵される造像も合わせ、「宋風」という大きな垂幕の内側で生じていた個別の地域的事例、すなわち、遼における唐・渤海の継承的要素、金における遼および高麗からのフードバック、高麗における遼および金との重層的な影響関係などを分析する必要性を、より強く認識することへつながった。

なお、シカゴ美術館およびネルソン・アトキンズ美術館などに所蔵される比丘像(頭部)など、金代乾漆像の作例は複数報告されている。また、高麗時代の乾漆像についても、近年の科学調査の進展により、新たな造像例が報告されている。これまでに従事してきた高麗における乾漆仏の調査成果をもとに、今回実地調査におよぶことができた金代乾漆比丘像(頭部)の特徴を合わせ、特定の素材に結び付いた表現様式・素材選択の思想的背景について、検討を継続する。

(2) 韓国国内における高麗の仏教造像および仏塔の実地調査

江原道、京畿道、忠清北道・南道を中心に、高麗時代の仏塔の浮彫尊像を中心とした作例収集を行った。すでにこれまで従事してきた調査において収集に及んだ資料に加え、近年の発掘調査などにより報告された新たな資料を加えることで、より網羅的な高麗仏・仏塔の把握に努めた。それにより、従来宋・元との関わりの中では見過ごされてきた要素、例えば、遼・金の仏頂尊勝陀羅尼経幢や仏塔に認められる浮彫尊像の構成パターンとの共通性などが見出され、さらに、統一新羅下台にすでにその萌芽となる要素が認められる点もあり、高麗の仏教造像・仏塔に見られる構成要素をより重層的・多角的視点で捉え直す必要がうかがえた。

(3) 対馬における高麗・朝鮮時代の仏教造像の実地調査

日本国内においては、対馬を中心に、高麗時代および朝鮮時代の仏教造像が安置されている。その特徴を確認することで、高麗仏の様式・技法のバリエーションを把握することを目指した。

なお、当初の計画においては、中国吉林省および黒龍江省の遼・金関連作品の現地調査を目指していたが、調査遂行に当たり問題が生じたため、韓国およびアメリカ国内の関連資料の把握に切り替えた。このことは、中国東北部の遼・金、特に金代の仏教および建築関連資料の網羅的な確認、十分な調査を行うことができないままとなり、大きな課題として今後に残されることとなった。

しかし、中国国外に所蔵・保管される単独像の作例収集に十分に時間を割くことができ、特に図像的特徴を確認しやすい中型金銅仏や、比較的状態の良い仏画において仏・菩薩・天部像の図像的特徴を収集できたことは、破損の著しい場合が多い仏塔の浮彫尊像における当初像の姿を復元的に考察する作業へとつながられたことは、一つの成果と考える。

4. 研究成果

高麗時代の仏塔には、塔身部に四仏を浮彫する例がある。このような例は統一新羅時代8世紀後半から始まるが、金剛界四仏などのように四尊の尊名と図像的特徴が区別できる四尊構成ではなく、多くの場合、南北に配置される尊像は一定していない。

なお、北宋・南宋の仏塔においては、塔身部を浮彫モチーフで荘厳する仏塔は、そもそも希であり、門扉の縁取装飾として、飛天・龍・鳳凰・植物文が用いられるにとどまっていることが多い。

一方、遼・金の仏塔においては、高麗の仏塔と同様、多くの荘厳モチーフを塔身部・基壇部に伴うことが多い。それは遼・金の版図のうち、山西省・河北省・河南省・北京市・天津市などの従来は漢民族の居住地であった地域には少なく、それ以外の領内に現存する仏塔において、特に顕著な展開を見せている。

例えば、朝陽北塔（遼寧省朝陽市、遼）興城白塔峪塔（遼寧省興城市、遼代創建・金代重修）など、第一層塔身に金剛界四仏表す例がある。『仏頂尊勝陀羅尼經』によれば、「仏頂尊勝陀羅尼 = 大日如来の印」とされることから、「舍利 = 仏頂尊勝陀羅尼」と位置づける関係性において、舍利が大日如来の智と同一視されることとなる。

その一方で、中京大塔（内蒙古自治区赤峰市、遼）海城金塔（遼寧省興城市、金）遼陽白塔（遼寧省遼陽市、金）などにおいて、第一層塔身の八面に龕を設け、南面が智拳印を結ぶ大日如来である他は、尊名と図像的特徴が明らかでない如来坐像七尊で構成される例があるが、それらの如来の印相のなかに、高麗時代の四仏に共通する表現も見出される。

統一新羅8世紀後半までの石塔には、四天王像を表すことが大半である。しかし、それ以降の舍利信仰に対する理解の変容、すなわち、四天王像に重きを置いてきた舍利信仰から、陀羅尼の効力とその教理的な理解を可視化する舍利信仰への変容が、仏塔の塔身部に如来坐像を配置することにつながったのではないかと考えられる。陀羅尼の効力の可視化こそ、遼・金の仏塔に顕著に認められる特徴であり、遼・金仏塔の第一の機能でもある。

初期仏教以来の舍利信仰とは異なる、当代仏教の信仰の中心であった五台山に始まる華嚴密教による新たな舍利信仰の問題は、日本を含めた東北アジアの仏教美術に共通する問題点であり、朝鮮半島の高麗の仏教美術の考察に及んでは、中国唐代およびその五台山信仰の威光を受け継ぐ遼・金の造像や仏塔も視野に入れて考察すべき、東北アジアにおける仏塔信仰の発展過程における重要な一要素であることが大いに推測される。高麗の仏塔における尊像は、その問題の一端を担いいうる好資料と言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ・水野さや「公州麻谷寺五層石塔の四仏について」、『金沢美術工芸大学紀要』60号、2016年、67-87頁
- ・水野さや「北京天寧寺塔と慈寿寺塔に見る「古典」意識とその意図」、『金沢美術工芸大学紀要』61号、2017年、186(9)-192(1)頁
- ・水野さや「普願寺址五層石塔 意義」〔韓国語・日本語〕、『2017』発表要旨集、財団法人仏教文化財研究所、2017年

〔学会発表〕(計1件)

- ・水野さや「普願寺址五層石塔 意義」、2017、瑞山市・財団法人仏教文化財研究所、2017年9月25日

〔図書〕(計4件)

- ・監修：朴亨國、共著（水野さや含む）『東洋美術史』武蔵野美術大学出版会、2016年、総373頁のうち87頁（256-271 287-301 312-365）
- ・水野さや『韓国仏像史』名古屋大学出版会、2016年、総265頁
- ・水野さや『八部衆像の成立と展開』、中央公論美術出版、2017年、総444頁
- ・責任編集：井出誠之輔・朴亨國、共著（水野さや含む）『アジア仏教美術論集 東アジア 朝鮮半島全』中央公論美術出版、2018年、総575頁のうち26頁（181-206）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。